

◎ 連合会だより

すでに1月が過ぎ2月。「世界」編集長・山口昭氏にあった。実に20数年ぶりの再会。実は、氏とは、学部が違うが大学の同級生である。昨年12月、北海道の協同集会で、北海学園大学の奥田教授と会ったが、彼も大学の同級生で、大学紛争のさ中、ライトブルーと黄色のヘルメットをかぶりともにたたかったなかまである。彼の話によると、同級生のうち、5～6人が大学で教鞭をとっているとのこと、親交が再開される日もそう遠くはあるまい。山口氏との再会は、そんな中での出来事であった。

「公と私ということが従来型の考え方では、とらえられない程ゆらいでおり、社会党の没落というのもそこに大きく起因している」

労協・高協の説明を聞きながら、「地域」「ネットワーク」などの大切さに大きくなずき、話してくれた。深部で問題意識の共通性を感じ次の再

会が待ち遠しい限りである。

実は、この稿は、東京健生病院の病床で書いている。日頃の不摂生がたたなり、なんと糖尿病とのこと、なさけないやら、1. 2. 3運動の真只中の戦線脱落が申し訳ないやら複雑な気持である。

入院すると、日頃気がつかなかったことにいろいろ気がつく。復帰後の活動にも生かしたい。

入院して10日目ぐらいに医療生協の病棟班会があった。全くはじめてなので不得要領のまま、参加していると、高齢の男性の患者さんが、不自由な口を懸命に動かして、「家族との面会の部屋が欲しい。私のことというよりは、みんなのために」と発言した。すごい。退院後、詳しくお話ししたい。世は住専問題で揺れている。退院する頃には、解散総選挙かも知れない。忙しい日々が早く来て欲しい。春よ来い。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

大病院への挑戦と高協づくりの本格化を基調とした第8次1. 2. 3運動は、精力的にスタートした。もっとも驚くのは、500床以上の大病院に、ほぼ全国が臆せず当たっていることと、意外に話を聞いてくれることである。「院内感染予防」に加えて、「非営利」の強調と、何よりも我々の働き方への自信と反響の結果であろう。

ここ数年は、よい仕事をめぐって技術的な水準や、事業全体の高度化・総合化が検討され、模索されてきたが、これらを支える思想が「協同」と「主体性」にあることを改めて自覚し、追求するという相関関係を強めてきたといえるだろう。とはいえ、まだ組合員の思い切った行動は少し影を潜めているが、何よりも所長や事務局員が、労協の優位性を実感し、自らが「仕事を取る」作業を経験し始めたことは、大きな事だ。この作業抜きに主体性や本当の意味での経営への参加はあり得ないというのが私の持論だ。組合員も巻き込んだ

大運動にしていきたい。

本部3階には、当たった所や増えた仕事がA4用紙に記入され、所狭しと吊されており、全国の盛り上がりを実感する。その数60枚を越え、当確の花も20を越えた。この勢いは先の全国合同事業推進会議へも持ち込まれ、我々の事業・運動に新たな確信の高みがつくれつつある。

そんな折りの（連）鍛谷専務の入院。ゆっくり休まれ、回復を祈るのみだが、人間らしく生き働くことと、この運動推進のバランス。難解なり。

古村 伸宏（センター事業団・事務局長）